報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　『方丈記』の表現と享受

氏　　名　岡山　高博

論　文　内　容　の　要　旨

『方丈記』末尾の「于時、建暦ノ二年、弥生ノ晦日コロ、桑門ノ蓮胤、外山ノ庵ニシテ、コレヲ記ス」という一文が示しているように、鴨長明が『方丈記』を擱筆してから約八百年もの歳月が経過した。その長い間、『方丈記』は絶えず読み継がれてきたため、文学作品として性格の異なる数多くの伝本が生ずることにもなった。本論では、そんな時代を超えて人々の心を惹きつけてやまない『方丈記』の多面的な表現とその享受のあり方について考察を試みた。

第一章「語り手蓮胤と災害叙述」では、『方丈記』前半の五大災厄における臨場感に溢れた描写と、作品末尾に記された「桑門ノ蓮胤」の署名がどのように関連しているのかを検討した。それ以前の古典文学とは異なり、長明が『方丈記』において、災害そのものと夥しい数の死者たち、つまり都に遍満する「穢れ」を文学作品の表現として対象化しえたのは、都の周縁に位置する日野山に庵を結び、反社会的境遇の中でときに死者の鎮魂供養にかかわる遁世聖「蓮胤」を書き手にしたからであると考えた。また、被災者たちの悲惨な姿を直視する『方丈記』の叙述は、慈円の『六道釈』に見たような仏教的観想に基づく表現にも通底する点があることを指摘した。

第二章「移動する草庵」では、あらかじめ移築を想定し、解体と組立てが可能なように設計された草庵の具体的な構造を検討することで、その移動性に託された長明の主意を明らかにした。その上で、広本と略本との草庵構造の描写の異同から、両者の隠遁に対する視点の相違にも検討を加えた。

広本に描かれた庵の構造としては、「ツチヰ」を組んだこと、「打覆」を屋根としたこと、建築の要所の継目ごとに「カケガネ」を懸けたこと、の三点に注目すべきである。特に、「ツチヰ」とは家屋の土台のことで、この構造は宮殿などの掘立柱建築とは異なり、土地所有の放棄を意味していた。こうした土台を組む建築方式は賀茂社や春日大社にも見られる。それは伊勢神宮や出雲大社の掘立柱建築が神の常住を象徴する

のに対し、神が一時的に降臨来訪することの建築的表現であった。以上のような移動と建築構造との結びつきを、長明は庵の建築にも巧みに取り込んだのであろう。方丈の庵は、世の中に安住しうる場所などないとの認識から、仮初めの一時の栖として考案されたもので、その目的は、自分自身の「心」を常に安穏に保つことにあった。

一方、略本にも、草庵の移動性への言及が見られるものの具体性を欠く。略本において主張されるのは、娑婆からの離脱や知足安分の重要さであり、一般的な浄土教義に基づき遁世の理念を強調する。長明の住居をめぐる度々の挫折と隠遁の実践により獲得された、広本の庵の特殊な構造や細部へのこだわりを略本の作者は理解できず、むしろ説教や唱導にはそぐわないとして、修行者が山林斗擻するのに相応しい草庵へと改変を加えたものと考えた。

第三章「草庵生活における美文の問題」では、第一章でも検討を加えた『方丈記』前半の五大災厄が叙事的な筆致で記されていたのに対し、閑居の楽しみを述べた後半に美文が駆使されるのはなぜか、その表現の意義について考察した。草庵の四季や数奇生活を美文によって書く営みは、長明自身の「心」の浄化を企図したものであり、それは同時に、遁世者として仏教的観想に到達することや敬仰する数奇者たちと結びつくための重要な回路となっていた。さらに、災害の連続する都での生活が「濁悪世」として描き出されていたのとは反対に、日野山における草庵生活は、長明の理想とする「心」の清澄な世界として意味づけられていることを指摘した。その上で、長明が『方丈記』において開拓した美文調の文体は、慶政がある高貴な女性に献呈するために書いた『閑居友』や、語り手を西行に仮託する『撰集抄』に見える美文にも、少なからず影響を与えているとの見通しを示した。

第四章「「不請阿弥陀仏」の主意について」では、従来の研究において、語義難解とされてきた『方丈記』末尾の「不請阿弥陀仏」の解釈について検討を加えた。この念仏は、草庵生活への執着を克服できない自己を凝視した結果、思想的な言語では答えられず唱えたもので、ある意味、それは知識人の思惟の限界を示していた。みずからの執着を懺悔し、凡夫の自己認識を深めた長明が、後世救済の願いを託すのは「こちらが請わずとも救ってくれる阿弥陀仏」であった。一方、結末に至るまで、娑婆の繋縛から離脱した草庵の住まいを、極楽浄土への階梯と説く略本には、自己の信仰態度について懐疑や懺悔の念が生ずる余地はない。これに対し、草庵に愛着するみずからの「心」をも相対化し、その執着と信仰との間に揺れ動く内面を鋭く描き出した点に、広本の文学的価値があると指摘した。

第五章「仮名の「記」としての方丈記」では、慶滋保胤『池亭記』をはじめとする漢文体の「記」の枠組みに倣いながらも、仮名の「記」として書かれた大福光寺本の表現とその表記のあり方について、『無名抄』「仮名筆」に見える文体意識や「近代古体」に説かれる幽玄体との関連から考察した。『方丈記』において、仮名の果たした役割、つまり歌語や和歌的発想による表現効果とは、対句を骨子とした論証性の強い文体に余情の美を付加することであり、また、隠遁の実践により感得した閑居の情趣を読み手の共感に訴えることであった。その一方で、遁世者としての仏教的思念が濃厚

な作品末尾の懺悔の記述には、歌語や和歌的発想による美文が駆使されていない。そこでは、信仰の不徹底な自己の凡愚性への認識に基づき、それに相応する文字として仮名が選び取られていると考えた。

第六章「流布本の問題点」では、古本系と流布本系との間に見られる、①大地震における武士の子の悲話の有無、②庵室における信仰実態の相違という、以上の二点を中心に考察した。長明の真作に近い古本系は「人ト栖」の無常という主題に沿って、災害の悲惨な情景を冷徹な筆致で描き出す点に特徴があった。また、草庵における念仏と法華の兼修は、法華持経者である翁と護法童子に見立てられた童との遊行、法華懺法に倣ってなされた結末の自問自答に照応しており、天台浄土教の伝統的信仰に基づき作品が緻密に構成されていた。

これに対し、流布本系に特有の大地震の挿話では、愛児を亡くした両親の悲しみの痛切さを読者とともに共有しようとする、情調的な表現にその文学的価値があった。閑居の気味を述べた「大方、世をのがれ……」という古本系には存しない一節もまた、隠遁生活に満足している心情を観念的に誇示する傾向が強い。こうした点から、論理の凝集性を重視する古本系が捨象してきた、災害に直面した被災者や都を離脱した遁世者の情調的な面に焦点を当て、それを増補して成立したのが流布本系の本文であると結論づけた。

第七章「略本の表現と論理」では、長明の手になる広本の表現と、説教や唱導性の濃厚な略本の表現との相違について具体的な検討を加えた。広本は、教典類を典拠とする表現の細部にも、長明の個人的な体験や文学的教養に基づく独自の変化を加えており、長明が新しい表現の創出にこだわり続けていたことを明らかにした。一方、略本は、教典類や仏教説話などに用いられる常套表現を尊重することで、誰にでも理解しうる平易な表現を指向していた。略本が文学作品として没個性的であることは、却って、これが専門的な浄土教学や文学的教養をもたない広汎な読者を想定して書かれたことを示している。

第八章「芭蕉とその周辺の方丈記享受について」では、松尾芭蕉が近江蕉門の中で最も信頼を寄せていた門弟であり、膳所藩の重臣でもあった菅沼曲翠の書写した、東京都立中央図書館加賀文庫蔵『方丈記流水抄』に検討を加えることで、芭蕉周辺の文化圏における『方丈記』享受について考察を試みた。加賀本を書写した曲翠は、元禄三年（1690）四月、伯父の幻住老人の旧栖であった幻住庵を芭蕉に提供した人物で、芭蕉はそこで『方丈記』を先蹤作品として強く意識しつつ、俳文『幻住庵記』を執筆した。曲翠は幻住庵において、芭蕉が『方丈記』と向き合いながら、何度も推敲を繰り返して『幻住庵記』を書き上げことを熟知しており、芭蕉の没後、幻住庵は曲翠や近江蕉門にとって師翁を思い起こす拠り所の一つとなった。曲翠の亡き芭蕉への追慕の念と『方丈記』への強い関心が、加賀本の書写という営みに結びついたと考えられる。